

＜株式会社エフエム東京 第423回放送番組審議会＞

1. 開催年月日:平成 27 年 11 月 4 日(水)
2. 開催場所 :エフエム東京 本社 10 階 大会議室
3. 委員の出席:委員総数 6 名(社外 6 名 社内 0 名)

◇出席委員(5 名)

横 森 美 奈 子 委員長	渡 辺 貞 夫 委員
秋 元 康 委員	ロバート・キャンベル 委員
川 上 未 映 子 委員	

◇欠席委員(1 名)

内 館 牧 子 委員

◇社側出席者(9 名)

富木田 代表取締役会長
千 代 代表取締役社長
平 専務取締役
吉 田 常務取締役
村 上 取締役 編成制作局長
山 科 常勤監査
延 江 編成制作局 ゼネラルプロデューサー
宮 野 編成制作局 編成制作部長
岩 城 編成制作局番組プロデューサー(オブザーバー)

◇社側欠席者(1 名)

森 田 マルチメディア放送事業本部 ゼネラルプロデューサー

【事務担当 村上放送番組審議会事務局長】

4. 議題: 番組試聴 (約 22 分)

『 yes!～軽井沢からの便り～

presented by ホクトプレミアム 霜降りひらたけ 』

2015 年 9 月 5 日(土) 18:00～18:30 放送

＜議事内容＞

議題 1:最近の活動について

■『FMフェスティバル2015 未来授業～明日の日本人たちへ』を開催

TOKYO FMをはじめとするJFN38局が毎年実施している、グローバル時代の未来を担っていく大学生たちにエールを送るシリーズ企画『三井住友フィナンシャルグループ presents FMフェスティバル2015 未来授業～明日の日本人たちへ～』を今年も開催しました。日本を代表する“知のフロントランナー”が、現役大学生と自由闊達な討論を通して、日本人としての誇りと自信を根づかせ未来を生きるヒントを探っていく企画です。

6回目を迎えた今年のテーマは、「戦後70年のイノベーション～新しいニッポン人の突破力～」。10/3東京会場（TOKYO FM）には、青色発光ダイオードを開発し2014年ノーベル物理学賞受賞の電子工学者・中村修二氏、演出家・宮本亜門氏、日本紛争予防センター理事長・瀬谷ルミ子氏。10/18大阪会場（FM大阪）には、京都大学総長で人類学霊長類学者・山極壽一氏、10/22新潟会場（FM新潟）には、新潟県出身の芥川賞作家・藤沢周氏を講師に迎えました。

5人の講師陣からは、各専門分野で培った豊かな知見に基づいた珠玉のメッセージを参加大学生たちに届けてくれました。

★中村修二氏

「海外に行って、外から日本を見て欲しい。モノの見方がガラッと変わる。」

★宮本亜門氏

「どうして人と違うのか、そこに原点がある。最高の個性をプラスに変えよう。」

★瀬谷ルミ子氏

「皆さんには無限の選択肢がある。でも選択肢には使用期限がある。」

★山極壽一氏

「人と人の信頼関係を醸成するのは、“時間”。人類の進化において時間は、“宝物”。」

★藤沢周氏

「数式化できない“文学”が、人間世界の矛盾に飛びこんで“リアル”をつかむ。」

この模様は、11月3日(火・祝) 16:00～19:00に全国38局ネットで放送しました。さらに、授業の模様を収めたビデオPodcastをラジオ放送終了後公開してまいります。

選挙権が18歳に引き下げとなる政治的にも大きな転換の時を迎え、この「未来授業」はさらに重要な位置づけとして取り組み、今後も大学生たちにグローバルな視野と感性を養ってもらおうシリーズ企画として取り組んでまいります。



▲中村修二氏と会場の現役大学生たち



▲大学生に質問する宮本亜門氏

■プロ車椅子テニスプレイヤーの国枝慎吾選手のスペシャルトークイベント『国枝慎吾 “TALKING COURT”』を開催

10月18日（日）、4度の年間グランドスラム達成など前人未到の記録を打ち立て続けるプロ車椅子テニスプレイヤーの国枝慎吾選手を迎えてのスペシャルトークイベント『国枝慎吾 “TALKING COURT”～親子で学ぶ「最強の男」になる方法～』を開催しました。司会は元テニスプレイヤーの杉山愛さん、「クロノス」アシスタントパーソナリティの高橋万里恵が担当しました。

当日は約300人の親子リスナーを招待して、国枝選手の野球に夢中だった少年時代、そして9歳の時脊髄に腫瘍が見つかり下半身が動かなくなったこと、やがて車椅子テニスに出会うまでの過程を当時の写真を交えながら振り返りました。

そして、国枝選手が「最強の男」であり続けるためのメンタルを磨く方法についてなど自らの経験に基づいたエピソードも披露。「メンタルトレーニングをして自分はナンバーワンなんだ、と思うことから有言実行の意識が生まれて練習の質も変わってくるし、自分への甘えもなくなる」と、当日参加したスポーツに取り組む親子リスナーへメッセージを届けてくれました。

このイベントの様子は、11月7日（土）14:00から全国38局ネットで放送いたします。



▲国枝慎吾選手と親子リスナー

【委員の意見および社側説明】

（「○」委員意見／「■」社側説明）

○未来授業の実施時期は、大学の学園祭・文化祭の時期とちょうど重なるので、リアルな大学の教室と生中継でつなげるのもいいのでは。その様子を収録した後で、いくつかの素材を使って番組にして、さらに大学の講義室に戻すと、より凝縮された展開に昇華されるのでは、と思う。

■まさにおっしゃるとおりで、毎年、回を重ねる中で、もっと立体的なワークショップにしていけたら、という考えはある。スタッフからもさまざまなアイデアが出てきており、次回以降はより、学生に想いが届く展開にしたいと思う。

■未来授業のポッドキャストは昨年までの累計で2400万ダウンロードされている。講義全編をネット視聴できるということが、かなりの反響を呼んでいるのだと感じる。

今年はツイキャスを使用して生中継を実施した。来年はもっと見えるかたちで2WAYをより強化して実施したいと考えている。

議題2: 番組試聴

【番組名】 『 yes!～軽井沢からの便り～
presented by ホクトプレミアム 霜降りひらたけ 』

【放送日時】 2015年9月5日(土) 18:00～18:30 放送 (JFN4局時間違いネット)

【番組概要】

本日まで試聴いただくのは、『 yes!～軽井沢からの便り～supported by ホクトプレミアム 霜降りひらたけ 』、9月5日(土) 放送回のダイジェストです。

この番組では、毎週、軽井沢と縁のあるひとりの文化人に焦点を当て、モノログで知られざるエピソードを紐解いていきます。人生の壁にぶつかった時、日常を離れ、彼らはひととき軽井沢を訪れました。軽井沢の風の香りに満たされながら、どんなことを思い、感じ、その後の人生につなげていったのでしょうか。

この回では、ジョン・レノンに焦点を当てました。ジョン・レノンが亡くなるまでの最後の三年間を過ごしたのは、妻であるオノ・ヨーコの別荘がある軽井沢でした。贅沢で幸せな家族の時間のストーリーです。

朗読は劇作家で俳優の長塚圭史のナレーションでお送りします。



▲長塚圭史

【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見／「■」社側説明)

○この番組は、これまでにどのような人物を取り上げているのか。

■ソニーの大賀典夫さんや白洲次郎さん、堀辰夫さんなどを取り上げている。

○企画自体はすごくいいと思う。しかし、今回聴いた「ジョン・レノン」の回のみに限って言えば、メッセージとして美しすぎると感じた。タイトルの「yes」と、

オノ・ヨーコの個展の「yes」が重なっているから特にそう感じたのかもしれないが、ジョン・レノンのざっくりとした生い立ちからオノ・ヨーコと結婚して軽井沢に行ってからのエピソードの全てがすごく均質に描かれることで、彼の人生が平凡なものに見える。

ジョン・レノンも一人の平凡な男だったんだ、と物語が終着するという、メタのメッセージとしてはとても機能していると思うが、この話を追っていてもジョン・レノンのことをこれ以上知りたい、とはあんまり思えない。

もしこれをもっと聴きたい、と思うような展開にするのであれば、せっかく軽井沢で「父になりたかった」というサブタイトルがついているのだから、軽井沢に行ってからジョン・レノンの、もっと具体的なエピソードを積み上げる方が、リスナーには印象が残るのではないか。

○第一印象としては、長塚さんの声とアコースティックの楽曲の相性がよくて、聴いていて気持ちの良い番組だな、と感じた。番組として一人語りに徹底したのも、雰囲気合っていて良かったように思う。

内容については、軽井沢に所縁があって、軽井沢に着地する内容にしなくてはならないのは理解するが、構成、もしくは主題の設定というところに問題があったのかもしれない。

ミュージシャンとしてキャリアを積み上げ、軽井沢に来てショーンが生まれ、最後の三年間という時点で果たしてジョン・レノンは、「あなたはここにいいんですよ」と軽井沢の風や人々に言われなければならないような状況だったのかな、本当かな、俄かには信じ難いと感じる。軽井沢には全ての人を幸せにするマジックがある、ということが軸であるかのように、すごく甘いストーリー展開にしているのではないか。家族との辛い過去が原動力になり、子供が生まれることで再び、自分はここにいい、ということを感じたのならば、それをもっと具体的に言明しないと、何となく文学的、何となく情緒的な感じだけでは、リスナーには理解し難いのではないか。

無理やり軽井沢にテーマを持っていったわりには軸として、軽井沢がジョン・レノンの心にどのような影響を与えたか、というところが希薄だったように感じた。

○当時の工業都市・リバプールと避暑地・軽井沢は全く別物なのに同じように感じた、などという笑止千万のこじつけた表現などから、構成に無理がある番組なのではないか、と思った。誰にでもノスタルジーというものはあるが、最近、そのような番組が多いように感じる。この番組にはもっと制作陣の工夫を望みたい。

○いい番組だと思うが制作が大変だろうな、と感じた。何を聞いてもスポンサーの商品が思い浮かぶ。そういう意味では、提供スポンサーの狙いは当たっているし、実現できていると思う。しかし、ラジオ番組の今後の課題でもあると思うが、提供

スポンサーが番組に過度に参加することによって、リスナーは違和感を感じるし、軽井沢でリバプールの風を感じた、というような表現にもなってしまいます。それはやはり、どうしても軽井沢の話にしないではいけない、というところに無理があるんだと思う。スポンサーの顔が見えすぎてしまうことが一番の問題。

青臭い青春物語のようなものは、クリエイターであればイメージで書くときがある。だから今回のように、作家がリバプールを知らないまま、軽井沢の風を感じた、と書くのは仕方ないことだと思う。ただ、もし自分がこの番組の作家であれば、絶対にジョン・レノンを取り上げない。ジョン・レノンの歌詞 1 行分を 2 週にわたってやるのはいいけれど、ジョン・レノンの生誕からの人生の全てを一度に語るなんて、そんなことできるわけない。それをしてしまうと、例えるならば、カルピスをすごく薄めて飲んでいる感じがする。それだったら、もっと軽井沢の三年間に特化して、その三年間に何があったか、ということが知りたい。軽井沢の街の音や声も聴きたかった。ロイヤルミルクティというキーワードがあるのであれば、この店のロイヤルミルクティは他とどう違ったのか、という話を聴きたいし、あるいは、ロイヤルミルクティは他の店と同じでも、その注いでいる音を聞きたい。

つまりは、何が問題かという、予算の問題とかスタッフ人員の限界とかいろいろあるのかもしれないが、汗をかいていない、と感じられてしまうことが一番の問題。楽曲を流すのであっても、ジョン・レノン、オノ・ヨーコの別荘があったところなのか万平ホテルなのか、わざわざそこにラジカセを持っていて、そこで再生し、他のノイズがあるところからジョン・レノンの曲が流れて、更にそこにかぶせながらちゃんとした音源が流れてくる、というような手間をリスナーはみんな求めているんだと思う。

普通にスタジオから編集で流せばいいのではというところを、わざわざラジカセを持って行って軽井沢でわざわざしているところから音が流れる、っていうことがやりたかったんですよ、ということをスポンサーやリスナーが理解できるような手間が必要。現在の軽井沢はアウトレットもあったりして、当時の「憧れの軽井沢」というのとは、印象も大分違うと思う。現在の変貌していく軽井沢と当時のジョン・レノンのいた軽井沢、っていうことが前段にあって、最後にテーマで、この軽井沢をジョン・レノンが見たら、「yes」と言っただろうか、と最後の一行だけ、そこにテーマをもってくるとか、工夫がほしい。

ラジオ番組でしか知り得ないエピソードであるとか、取材してきて見つけたものを大切にしないといけない。それで初めて TFM ならではの番組が成立すると思う。そこがとても、勿体なかったと思う。

○タイトルを見たときに、このスポンサーは長野だなあということも鑑みて、軽井沢を中心とした番組であると、と受け取った。番組が始まったら、ジョン・レノンの生い立ちから始まったので、軽井沢というテーマはどこにいつてしまったのだろう、と思った。最初はそれこそ、軽井沢の枯れ葉の積もった道を踏みしめながら歩

くカサカサカサという音がして、今の持ち主はわからないけれど、ここが昔ジョンとヨーコが住んでいたところなのかしらとか、そういうルポルタージュみたいな感じなのかな、と。一種そういうようなイメージで捉えていたら、全然違ってどこかで聞いたような話ばかりだったので、ビートルズに興味のない若い人が聴いたら、どう感じるのだろうか、と思った。この番組でこれまでに取り上げている人の職業の括りも全てバラバラなので、毎回、どんな放送をしているのかな、という心配もある。

本来、昔から別荘地の代名詞である軽井沢のリアルな魅力を知りたいという人は、たくさんいると思う。最近だとビル・ゲイツがわざわざ軽井沢、と言って別荘を建てたり、未だにとても魅力のある土地。だから、番組の中で、今に通じるリアル感のような、情緒的ではない部分も、すごく知りたかったし、そういう部分を取り入れる方が、よほど軽井沢の良さをテーマにした番組として意義深く成立したのではないか、と感じた。

○この 30 分という短い番組で、一人称と三人称が混在している部分も気になった。語り部が一人なのに、突然、客観的な話と、「僕は」という一人称の話が流入してきて、聴いていてとても混乱した。また、表現に刺激がなく全体的に紋切り型である点も、リスナー視点ではひっきりがない。シナリオ部分についても、もう少し印象的な部分を作ることが必要だと思う。

■実は、軽井沢の現地にも取材に行っていた。しかし、今回は番組設定として「一人語り」という部分に落とし込んだので、使用できない素材も多かった。とてもいいお話がたくさん聞けていたので、本日、委員の皆様のお話を伺って、折角の取材が番組に活かせず、勿体なかったな、と感じた。また、SE も実際に現地で取ってきた音を使用していたが、そこまでの効果に感じられず、今後、演出面でのブラッシュアップを心掛けたと思う。

6. 公表

議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送: 番組「SPO☆LOVE」

11月28日(土)5:00～6:50放送

② 書面: TOKYO FMサービスセンターに据え置き

③ インターネット: TOKYO FMホームページ内 <http://www.tfm.co.jp>

7. その他

次回の放送番組審議会を、12月1日(火)に開催することを決めた。